

論評

パソコン時代のインド学

——〈CATUR〉試用記——

金 沢 篤

このような論題に眉を顰める研究者もまだまだ少なくないであろう。手作りのデータ・カードを何万枚も私蔵し、それを駆使して和文原稿は手書きで、欧文原稿は手動式のタイプライターでと、長年精力的に書き続けてこられた或るインド学の大家も最近ワープロを導入されたと聞く。キー入力に慣れない人は、手慣れた手書きの快適さをなかなか手放せないことも無理からぬことである。ましてや手書きの際の手の動きがもはや頭の働きと不可分離となっているかの、「書きながら考える」タイプの人の場合はなおさらであろう。そのような人にワープロやパソコンの効用をどんなに説明しても無駄かもしれない。所詮そうした電子機器は清書のためのちょっとしただけ目新しいツールにしか過ぎないのである。だが、いずれにしてもここらが一つの潮時ではなからうか。

インド学・仏教学研究の現場にワープロやパソコンが導入されるようになってからも既に久しい。論文等の原稿作成は言うに及ばず、研究発表の資料作成、授業のための教材作成と、それら電子機器が旧来の万年筆やタイプライターに取っ

て代わったという観がいよいよ顕著になった。それは、そうした機器の性能・操作性が飛躍的に向上し、その価格が驚くほどに低下したこと等による。その結果、電子機器と聞いただけで拒否反応をおこしていた者にとっても断然取っ付き易いものとなった。悪筆に悩んでいた者は一々清書する手間を節約できるようになり、資料の蓄積・整理、活用・更新に多大の浪費を強いられてきた者にとっては、従順にして有能な専属の助手を雇い入れたことと同じ研究環境を実現することになった。

特に特殊な文字表記を伴うサンスクリット語等の言語を相手にせざるを得ない研究者には、自分専用の文字フォントを簡単に作成できるようになっているそれらの機器がもたらした便宜の程は計り知れない。ワープロ専用機に限定しても、近年に見られる文書作成のための書式設定の容易さ、入力の際の簡便さ、印字機能の精度の向上等には目を見張るものがある。ワープロ専用機に比べて使いこなすにやや専門的な知識の習得が不可欠とはいえ、パソコンで使える市販ワープロ・

ソフトも各種豊富に出揃い、各々が自分の好みや必要に応じて自由に選択が出来るようになってきているし、その機能も驚くほどに高度に洗練されてきている。

筆者も、欧文に関しては素朴な手動式のタイプライターから始めた口だが、サンスクリットをローマ字表記する際の特
殊記号だけは後からペン等で書き加えていかなければならな
かった。せっかく美しくタイプアウトされた原稿と手書きの
不細工な特殊記号のアンバランスに対する不満は、その後特
殊記号をキーに持つ電動タイプライターに乗り換えることで
解消された。さらにその後は、その電動タイプライターも見
捨ててワープロ専用機で特殊文字フォントを自分なりに作成
してしばらく愛用していたが、数年前に思い切ってパソコン
に切り替えて今日に到っている。いずれも習熟するにはそれ
なりの学習と努力を要したが、特別の専門的な素養というも
のが必要であったということはない。文書作成といった最も
普通に行う作業には、バカチョン式の既成のシステム・ソフ
トで十分用が足りるのである。

タイプライターとワープロ・パソコンの一番の違いは、後
者では一度作成した文書・データの保存・加工・再利用が容
易に可能である、という点であろう。また、ワープロとパソ
コンでは、その自由度の点で断然パソコンに軍配が上がるの
である。その点こそが、数年を経てやっと自分なりに整備出

来たワープロ環境を敢えて捨ててまで、筆者をしてパソコン
の導入に踏み切らせたところのものなのである。単なる文
書・データの作成・処理に留まらず、とにかく何でも出来る
ような気にさせるパソコンであってみれば、しばしばあらぬ
方向への逸脱の誘惑はあったし、その環境の整備に少なから
ぬ時間を浪費したことも否めない事実である。だが、もはや
取って返しようなのない今となってはやはり思い切ってパソコ
ンに切り替えてよかったと思うようにしている。おまけに電
話回線などを利用してのいわゆるパソコン通信を媒介とする
ならば、その電子機器は単なる文書・データの作成・処理ツ
ールに留まらず、インド学研究でも当然不可欠な資料・デー
タの収集ツールをも兼ねることになる。

いつの時代にあっても幅広い正確な情報収集・学术交流
は、「井の中の蛙」式の研究に墮す危険を回避するためにも
重要であろう。かつてはマイナーな分野であったインド学研
究がこれほど活況を呈してきた時代にあっては、自分の研究
を明確に位置付け、他の研究者の研究成果を踏みにじること
を避けるためだけに、学界の動向等に絶えず注意の目を注
いでおかなければなるまい。多様化・専門化の波は当然この
分野にも波及してきており、忌々しいことながら個人がその
全てに目を配ることが段々困難になってきている。だが、だ
からと言って知らぬ存ぜぬを決め込むことも出来ないし、そ

れが許される状況でもないようだ。特にそのような見地からというわけでもないが、最近筆者も必要な機器を取り揃え、パソコン通信というものに手を染めてみた。一人よがりな情報通を任じていた筆者ではあったが、世界の様々などころで実に想像以上に様々な試みが展開されていることを改めて実感させられることになった。それらの様々な試みを全てひとしなみに評価することは、進歩に対する盲目的な礼賛に結びつく恐れもないわけでもないが、そのいずれもがインド学仏教学研究の進展に逆行するものでないだけは言えるような気がする。渦中にあるとことん突き進むのも一つの道かも知れないのである。

前口上が長くなって恐縮であるが、とまあこうした状況の中で手にしたパソコン用の一つのソフトが、筆者が本稿で紹介しようとするCATUR（チャトゥル）なのである。これは、これまで筆者などが毎日のように接してきたサンスクリット語文献を埋め尽くすあのデーヴァナーガリー文字を自分のパソコン機器を使って自由に処理・印字出来るといふ、とにかく凄い夢のようなソフトなのである。これまでもデーヴァナーガリー文字専用のタイプライターの存在は聞こえていたし、わが国にも数は少ないものの何台かはあって現に使われているとのことであった。が、それはその数からしても当然極めて高価なものに違いなかった筈で、いわゆる音節文

字と規定されるデーヴァナーガリー文字の顕著な特徴でもある合体字（samyuktavarna）の多様さを考えたなら、和文タイプライターのように厳めしく極端に操作性が悪いものか、機能の制限された不細工なものに過ぎないだろうと推量された。所詮綺麗なデーヴァナーガリー文字はインドの印刷所の専売と諦めて、せいぜいが幾つかの特殊記号を混えてのローマ字表記で済ませてきたというのが実情である。読むことさえ出来ればインド人ならぬ研究者にはそれを書くことなどのもつての他で、デーヴァナーガリー文字で日記をつけているなどと言おうものなら酔狂呼ばわりされるのが関の山、実際無用であったことも事実である。サンスクリット語の初学者には、この見るからに複雑そうなデーヴァナーガリー文字が学習意欲の持続に大きな障害となっているそうである。ともあれ、非インド人研究者のみならず、西洋の研究スタイルに馴染んだインド人研究者による論文や校訂テキストではローマ字でこと足りたのである。

だが、仏教学を始めとするインド学が世界的規模で展開されている今日にあっては、サンスクリット語一つとってみても、それを表記する文字にも実に色々な文字があることが改めて広く認知されるようになってきている。これまでに蓄積された研究の量も膨大なものとなり、使われている文字も言語も多岐にわたっている。筆者に関係の深いインド哲学文献

に限っても、それが単にデーヴァナーガリー文字によるヒンディー語の資料・研究論文というだけでほとんど相手にもされないというのが、悲しいかな現状でもある。サンスクリット語は読めてもヒンディー語を読めず、研究論文があることを知りつつも読もうと努力さえしない研究者の何と多いことか。これらのいまだ陽の目を見ることのない膨大な資料や研究成果を活用するためにも、文字そのものに対する関心やインド系諸言語に対する関心が高まってきてもいい状況に達してきていると思われるのである。写本を使っての研究環境の貧弱なわが国にも、数は少ないものの心ある研究者の意欲的研究の成果の報告などを通じて次第にその重要性が認知されるようになってきている。こうした中でこのある意味では画期的とも言うべきパソコン用ソフトの存在が、サンスクリット語等を駆使するインド学研究者の間にももう少し広く知れ渡ってもいいのではないか、というのが本稿を書こうとした筆者の真の狙いである。

この問題のC A T U Rを開発した人物は、東京外語大学インド・パーキスタン語学科の町田和彦助教授である。町田氏はこれまでもわれわれインド学仏教学を志す者の最も一般的な学術交流の場である印度学仏教学会の主催したコンピュータ関連のシンポジウムにも参加された他、学会誌にも何度

かその成果を発表しておられる気鋭のヒンディー語学者であるが、筆者が近時参加させていただいたパソコン通信の言語学関連のネットワーク、LINGUAL-NET⁽¹⁾の中心人物の一人でもある。「サンスクリット語は、綴り字と発音が過不足なく完全に一致していて機械処理にはまことに好都合な言語である。一方現代語では、綴り字と発音が一致しないのはむしろ普通である。綴り字から常に正しい発音を導きだせる保証はないし、その逆も同様である。」⁽²⁾と言われるインドの現代語の専門家によって、このソフトが開発されたこと自体は、その必要がしからしめたところで殊更驚くべきことではないかもしれないが、その成果であるソフトの方はサンスクリット語しか縁のないサンスクリット語教育の末端を担う筆者の如き者にも甚だ有用なのであった。

筆者は浅学の身でありながら数年前から本学でサンスクリット語の授業を担当させていただいているが、その授業の開始時にサンスクリットは一つの言語体系であり、デーヴァナーガリーは一つの文字体系であることを敢えて明言する必要があった。そしてサンスクリット語文献を専門的に研究していくためには、欧米諸語は勿論のこと、サンスクリット語周辺の諸言語の習得ならびにインド系の各種文字体系の習得の必要を説くことにしてきた。さらに、ローマ字を使ってサンスクリット語の初等文法を嚙ってきた学生に対して、とりあ

えずはインド系文字の代表的なものであるデーヴァナーガリー文字に習熟することを勧め、テキストには出来る限りデーヴァナーガリー文字で表記されたものを用いることを心がけてきた。だが、その際ローマ字で専らサンスクリット語を勉強してきた学生用の適当なデーヴァナーガリー文字による教本に乏しく、自分なりに教本を編纂する必要を痛感することも一再ならずあった。

確かにサンスクリット語学習者用の読本として、例えばイギリスの碩学 John Brough 博士の『Selection from Classical Sanskrit Literature, with English Translation and Notes』⁽³⁾

があり、わが国にも辻直四郎博士の『サンスクリット読本』⁽⁴⁾がある。また本学には長年サンスクリット語を担当されておられる奈良康明博士の『梵語仏典読本』⁽⁵⁾という優れたものがある。だがこれらに共通して言えることは、すべてローマ字表記を採用している点であろう。これは編纂者の「サンスクリット語の学習にはデーヴァナーガリー文字などいらない」という過激な考えを反映させた結果ではなく、デーヴァナーガリー文字を使用出来ないという金銭と時間に還元可能な無念の外的制約によるものではなかったろうか。これら近年の諸学者による優れた選文集が今日、一時代前の Charles R. Lanman の『A Sanskrit Reader: Text and Vocabulary and Notes』⁽⁶⁾ ほどにも流布しておらぬのは、後者が、サンスクリ

ットの初学者にとって必ずしも不可欠なものでないヴェーダの抜粋を含んでいるという無駄(?)を持つにも拘らず、デーヴァナーガリー文字を見事に使用しているという、読本としての抜群のバランスの良さをもつことに起因すると思われるのである。だが、わが国ではこうしたこれまでならば夢にも考えられなかったデーヴァナーガリー文字による出版物も、このソフトを用いれば難なく実現できるのである。しかも大がかりな仕掛けも特別に高価な機器も用いることなく、パーソナルなベースで可能となるのである。

現にいち早くこの便利なソフトの存在を聞き付けたわが国のサンスクリット学者が、二人までも自分なりの「サンスクリット語教本」を製作中であると聞く。当然ながら当の開発者であられる町田氏もヒンディー語の文法書・辞書・教材をそれを用いて盛んに製作されておいでとのことである。筆者は学部学生の頃、町田氏の先生に当たる今は亡き土井久弥先生よりヒンディー語を教わったことがあるが、その際に先生が用意されたコピー製本された粗末な教本⁽⁷⁾の中に、手書きではないものの必ずしも美しいとは言えぬデーヴァナーガリー文字を見出して不思議な感動を覚えたことを思い出す。だが、それも考えてみればもう十数年前のことである。CA TUR に対する筆者の思い入れは、多分たわいなく過ぎてしまったこの十数年の歳月とも関係しているのだろう。

先頃、昨年末に Lanman の A Sanskrit Reader 等で筆者などにも馴染みの『ナラ王物語』の全和訳⁽⁸⁾を出版された鑑淳先生の苦勞談を拝聴する機会⁽⁹⁾があった。その際鑑先生は、和訳の底本とされた W. Caland のローマ字テキスト⁽¹⁰⁾をデヴァナーガリー文字に還元して教本として出版すべく、既存のデヴァナーガリー本をコピーしたものを切り貼りして作ったと言われるデヴァナーガリー・ローマ字対照のテキストの分厚い原稿を示され、それを作るに膨大な時間をかけたと言われたのは大いに驚いたものである。確かにこうした作業は誰かがやらなければならないものではあるにしても、イメージ・スキャナーというもので、Caland のローマ字テキストをコンピュータの中に取込み、その文字データに必要な加工を施して、CATUR を使って印字すれば、何分の一にも労力を節約できた筈であろう。実際、この話を町田氏に申し上げた際の同氏の反応は記すまでもあるまい。さて、こうした前置きばかりで筆者に許された紙数が尽きようとしているので、以下に筆者が実際にそれを使用してみた顛末を簡単に述べようと思う。

このCATUR (デヴァナーガリー文字版) は、開発者自身によれば、「エディタなどで作成された MS-DOS の標準テキスト・ファイル (アスキー・ファイル形式) をドット・プリンタで印字させるパソコン用のコンポーザ (comp-

ser)⁽¹¹⁾」であり、全角文字 (全角の漢字かな、英数字、ギリシャ文字など) とナーガリー文字 (標準、ラージサイズ)、転写記号 (小文字、大文字の混在)、半角文字 (英数字カナ記号など) の「四種類の文字を自由に混在させて印字させることができる」ものである。名称CATURの由来は、 Sanskrit 語の catur (四) と catura (ヒンディー語では catur 賢い) に求められることである。細かい説明は開発者自身による「マニユアル」⁽¹²⁾に就いていただきたいが、ここでは以下の諸点についてだけ報告したい。

パソコン機器としてわが国で最も普及している NEC 製の PC98 系のパソコン (互換機も可) 本体とディスプレイ、解像度 160dpi の漢字プリンタが必要である。また本ソフトの他に NEC 社より発売されている N88BASIC.LIB が必要である。⁽¹³⁾それだけである。使い方もいたって簡単で、パソコンを起動させてから、所定のファイルを納めたドライヴ (ないしディレクトリ) にあって、所定の方式で入力・作成したテキスト・ファイルを D:\CAPTUREX.E という実行プログラムでプリンタに打ち出すだけである。パソコンで普通に使用されている市販のワープロ・ソフトの印刷機能と同様、書式設定、文字装飾等も完備しているし、その操作もいたって簡単である。また、プリンタで印字する前に D:\VIEW.EXE という実行プログラムでディスプレイに仕上り状況を映し出

してみることも出来る。

このシステムで特筆すべきユニークな点は、サンスクリット語等をキーボードから入力する方式である。例えば *ai, au*、*ai, au* はそのままに、*ai, au* のような長音記号の付いた母音は *aa, ii, uu* と、*i, i* は *u* と、また普通の子音はそのまま、*kh, ch, fh, dh, th, dh, ph, bh* の用な有気音は *k, c, T, D, f, d, p, b* といった具合に、サンスクリット語を少しでも齧ったことのある人には容易に体得できる方式であろう。キーボードから入力した文字が直ちに望みの字形に変換されて画面に表示される手のものではないだけに、なかなかきめ細かく工夫された優れた方式と言えるよう。コンピュータを介してのデータの共有が叫ばれている昨今、その入力方式の統一の際の一つの範をなすものとしても意味深いものであり、パソコンでちょっとしたワープロ・ソフトを使ったことのある人ならば、「マニュアル」と首っぴきで半日もこのソフトに熱中すれば、容易に使いこなせるようになるだろう。また、さらに有難いことは、文字フォントを自分なりに簡単に作り変えてキーに割り当てることもできる *FONTMAKE.EXE* という実行プログラムなどの専用ユーティリティが標準で装備されていることである。そして何よりも喜ばしいことは、この「賢い」ソフトの使用が無料で許されるという点であろう。本学にも今やパソコンを使っておいでの学生諸君も大勢いる

であろう。そういう方もこのソフトを用いるならば、サンスクリット語文法習得にも一段と熱が入るに違いない。おまけに開発者自身のサポートもおそらく懇切を尽くしたものであり、至れり尽せりといったところか。

数年前から印度学仏教学会などでも大型コンピュータなどを使つてのデータベースの作成等の事業に本格的に取り組み始めたと聞いている。そのシステムの構築、方式の統一・確立に様々なプランが提出され、検討が重ねられているとも聞く(ここで紹介する町田氏の *CATUR* も実のところ氏の大きな構想に基づくシステムのほんの一部をなすものに過ぎないらしい)。そうした壮大な試みとは別に、とりあえずはパソコンを手足の如く駆使できるインド学者の輩出が待たれてもいる現在である。そうした目的実現にも一役買うことになろう優れたこのパソコンソフトをきさきやかながらここに紹介できたことは筆者としても嬉しい限りである。仏教学研究の場である本論集においてその機会を恵まれたことを感謝申し上げますと共に、本ソフトの試用を許された本ソフトの開発者、ディオニュソスの信奉者でもあられる町田和彦助教授に心より感謝申し上げます。なお、*CATUR* の内容説明に誤りがあったとすればその責は全て筆者にあることを付記しておきたい。

(April 30, 1990)

- (1) このパソコン・ネットでは、アジア・アフリカの言語・文化・宗教に関心をもつ四〇人ほどの会員によってデータ・文書処理に関する技術・情報交換を中心とした活動が行われている。詳しくは、いずれ機会を改めて紹介したい。
- (2) 町田和彦「インド系文字のコンピュータ用翻字システムについて」『印度学仏教学研究』第三六巻第一号 日本印度学仏教学会（東京）昭和六十二年二月 三二六頁三一六行。
London, 1978 (2nd Ed.).
- (3) 春秋社（東京）一九七五年六月。
- (4) 中山書房（東京）出版年不明。奈良先生の序文には昭和四二年四月の日付がある。本書は既に絶版である由。筆者の所有するものは、何年前かに駒沢大学内の書店で購入した海賊版だが、現在それが入手出来るかも不明である。その目次より内容を紹介すると「アシタ仙の予言 (Mahā-vastu)」、「樹下静観 (Lalita-vistara)」、「成道 (Mahāpadāna-sūtra)」、「七仏通誠偈 (Udāna-varga)」、「法華経如来寿量品偈」、「法華経観音普門品偈」、「阿弥陀経」、「大無量寿経」、「般若波羅蜜多心経」、「華嚴経十地品」、「仏頂尊勝陀羅尼」、「消災吉祥陀羅尼」、「大悲心陀羅尼」といったヴァライエティに富んだものである。
- (6) Cambridge (Mass.), 1884 (1st Ed.).
- (7) 筆者にとっても想い出多いこの教本は、本稿の本文を書く段階では探し出して確認したのだったが、今注を付ける時になつてまたも姿が見えなくなってしまった。その子細について記し得ないことを遺憾とする。

パソコン時代のインド学（金沢）

- (8) 鍔淳訳『マハーバーラタ ナラ王物語—ダマヤンティー姫の数奇な生涯』岩波書店（東京）一九八九年一月。
 - (9) 一九九〇年二月二四日午後、東洋文庫にて行われた鍔博士による『マハーバーラタ ナラ王物語』の邦訳（岩波文庫）について」と題する研究発表を指す。
 - (10) Savitri und Nala, zwei Episoden aus dem Mahābhārata: Text [Roman] mit kurzen erklärenden Noten und Glossar, Urecht, 1917'. その子細については鍔訳前掲書四頁参照。
 - (11) 町田和彦「CATURのマニユアル（デーヴァナーガリー文字版）1989/11/16 現在」『南アジア言語文化』第二号 南アジア言語文化研究会（東京）一九八九年二月 一六五頁—四行。
 - (12) 注（11）参照。
 - (13) 前掲マニユアル一六六頁等参照。
 - (14) こうしたいわゆる一般のウイズィウィック (WYSIWYG) 方式ではなく、このCATURは数学用のコンポーザーとして夙に名高いTEX同様、バッチ方式と呼ばれるものに属する。 (June 25, 1990)
- * なおCATURによる印字例として参考までに次頁に付したものは、筆者が家で常用している (NEC) PC-PRI01F というかなりボロい旧式プリンタによるものである。きわめて美しい印字例が得られるレーザー・プリンタによるものを敢えて用いなかった。

(1) 全角モード

CATURによる印字例（Vaidya 本『般若心経』より）

(2) ナーガリーモード

प्रज्ञापारमिताहृदयसूत्रम् ।

॥ नमः सर्वज्ञाय ॥

आर्यावलोकितेश्वरबोधिसत्त्वो गम्भीरायां प्रज्ञापारमितायां चर्या चरमाणो व्यवलोकयति स्म । पञ्च स्कन्धाः, तांश्च स्वभावशून्यान् पश्यति स्म ॥

इह शारिपुत्र रूपं शून्यता, शून्यतैव रूपम् । रूपान्न पृथक् शून्यता, शून्यताया न पृथग् रूपम् । यद्रूपं सा शून्यता, या शून्यता तद्रूपम् ॥

एवमेव वेदयासंज्ञासंस्कारविज्ञानानि ॥

(3) 転写モード

Prajñāpāramitāhṛdayasūtram /

// namaḥ sarvajñāya //

āryāvalokiteśvarabodhisattvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryā-
ṃ caramāṇo vyavalokayati sma / pañca skandhāḥ, tāṃśca svabhāvaś-
ūnyān paśyati sma //

iha śāriputra rūpaṃ sūnyatā, sūnyataiva rūpam / rūpāna pṛthag
sūnyatā, sūnyatāyā na pṛthag rūpam / yadrūpaṃ sā sūnyatā, yā
sūnyatā tadrūpam //

evameva vedayāsamjñāsamskāravijñānāni //

(4) 半角モード

&praj~aapaaramitaah^dayasuutram /

// namaH sarvaj~aaya //

|| aaryaavalokiteSvarabod'isattvo gamb'iiraayaaM praj~aapaaramitaayaaM
caryaaM caramaaNo vyavalokayati sma / pa~ca skand'aaH, taaMSca
svab'aavaSuunyaan paSyati sma //

|| iha Saariputra ruupaM Suunyataa, Suunyataiva ruupam / ruupaanna
p^t'ak Suunyataa, Suunyataayaa na p^t'ag ruupam / yadruupaM saa
Suunyataa, yaa Suunyataa tadrupam //

|| evameva vedayaasaMj~aasaMskaaravij~aanaani //